

「君のヒラメキが、みんなが楽しむ きっかけとなっていた」

こんにちは、久保です。2025年3月12日の研究会では「⑥（大人の決めたことを押しつけるよりも）一緒に決まりをつくっていく」をテーマに、事例を持ち寄り、語り合いました。語り合いを重ねる中で、大事なことがわかってきました。それは、「子どもどうしの決まりづくり」が見事だということです。

私は「大人の決めたことを押しつけるよりも）大人と子どもが一緒に決まりをつくっていく」という姿を念頭に置いて、冒頭のテーマにしたのですが、実際に事例を持ち寄ってみると「大人に決まりを押しつけられなくても）子どもどうしで一緒に決まりをつくっていく」という姿がたくさん集まったのです。

さっそくですが、渡邊里菜さん（宮前おひさまこども園）の事例をどうぞ！

* * *

■事例 自分のコマ

『コマ』遊びが年明けから園で流行している。自分で紐を巻いてコマを回したり、手に乗せる『手ごま』などの技に挑戦をしたり、友だちと一緒にコマを回し、どちらが長く廻り続けるかを競って楽しんでいる。特に、年長児は園長先生の前でコマを回せると『コマ名人』になり、自分のコマをもちょうとができることもあり、

主体性が湧き出ちゃう保育

第13回 一緒に決まりをつくっていく（その1）

久保健太

大妻女子大学大学院教員

張り切っている。

異年齢で過ごす夕方の時間、年長児が「自分のコマを回したい」と言った。年少中児は持っていないから羨ましくなってしまうこと、なくしてしまったら大変と伝えると、渋々と園のコマを使った。

すると、年長児の「君は黙々と素材を取り出し、何かを作り始めた。そしてコマ回しをしているみんなに、「これつけたら、自分だけのコマだよ！」と言った。『自分のコマを回したい』気持ちだった年長児だけでなく、年少中児も『自分のコマ』を作り始めた。自分の好きな色の素材を切ったり、テープを貼ったり、大きさもさまざまで、大きくして、羽のようにしてみたりと自分たちで工夫していた。

「君のヒラメキが『自分のコマ』をみんなが楽しむきっかけとなっていた。自分たちで決まりをつくっていくことで、より『楽しい』『面白い』と感じているように思えた。

その日から、『自分のコマ』を進化させ、今まで以上に日々コマ回しを楽しんでいる。

* * *

以上が、里菜さんの事例です。

そんな里菜さんの事例を囲んで、語り合いが始まりました。

「君のヒラメキが『自分のコマ』をみんなが楽しむきっかけとなっていたって、いいですよね」

「決まりをつくるって、立派なことだと思われがちじゃないですか。確かにそれは立派なことなんだけど、子どもたちって、それを『立派なことだ』って思っていないんじゃないかな」

「どういうこと？」

「うーん、なんと言うか、決まりをつくるとか、決まりを守るっていうことを、大人に褒められなくてやっているわけじゃないと思うんですよね。それよりも、決まりをつくったり、決まりを守ったりした方が楽しいからやっているんじゃないかな」

「あー、楽しいからやっているというのは、わかります。」

「里菜さんの事例で言えば、自分のコマを廻せ、

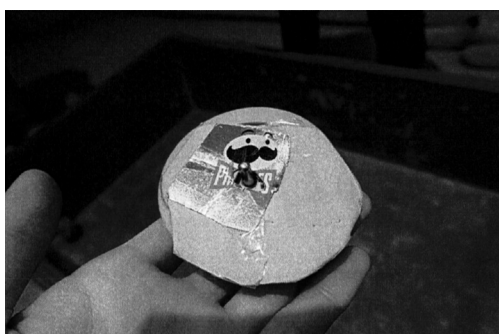
年長さんは楽しいかもしれないけれど、年少さんはつまなくなっちゃう。だからテープを貼って『これつけたら自分だけのコマだよ！』という決まりをつくった」

「その決まりだったら、年少中さんも楽しいからね。決まりをつくるとか、決まりを守るといった正しさって、楽しさから生まれてくるのかもしれないね」

楽しさから、正しさが生まれてくる

保育者どうしの語り合いを聞いてみると、とても勉強になります。

特に「決まりをつくったり、決まりを守った



り」といった「正しさ」が「楽しさ」から生まれてくるという点は、非常に重要です。

私は、この言葉を聞いて、大田堯の文章を思い出していました。大田は、子どもどうしの「響き合い」について、次のように書いています。

「自然というものはセンス・オブ・ワンダーを子どもから引き出すと同時に、自然そのものがいろいろな興味をひき起こしてくれます。つまり、教えたがらないところに、自然のよさがあります。」

ただ、非常にいいことは、自然の中へ子どもをおいておけばセンス・オブ・ワンダーができるというものではなく、『不思議だな』と思った時に、『ああ、不思議だねえ、調べてみよう』といってくる相棒が必要だということです。つまり、人間関係の中でセンスが確認されることが必要です。悪童どもとたくらみをして、そのたくらみを成功させるために自然の中をかけめぐり、自然を知り、事物を知る中で、不思議さを感じたり、新たな発見をしたりする』（大田堯「いま、『子どものしあわせ』とは」（『子どものしあわせ』1992年1月号、日本子どもを守る会）

自然を相手にして、センス・オブ・ワンダーがはたらく。そこから、さまざま「たくらみ」が生まれてくる。そのたくらみを成功させようと、相棒と一緒に、工夫をする。

思えば、本連載の第1回（2024年10月号）

で里菜さんが紹介してくれた『ザリガニ釣り』の子どもたちがそうでした。子どもたちはザリガニを釣るためにさまざまな「たくらみ」をしていました。

そうして「釣れそうで釣れないもどかしさ」を共有しながら、響き合っていました。言い換えれば「響き合い」の楽しさを、子どもたちは存分に味わっていました。そうした「楽しさ」があったからこそ、みんなが楽しくなるような「決まり」（約束や順番など）を生み出そうとするのでしょう。それを「正しさ」と呼ぶのだと

文中の「だろう!!」という信頼感」とは、「貸してくれるだろう!!」という信頼感」のことで

続いて、阿部茜さん（和光保育園）の事例をどうぞ！（茜さんの手書きが味わい深いので、手書きのままで）

いやー、いいですね。

自分たちの心地よいスタイルを 探しているんだなあー！

したら、やはり、「正しさ」の土台には「楽しさ」があるのです。

楽しい!! が続くには...
ダンボール小屋にダンボールを取り付けると、よくこのスタイルにハマる くらげで釣る

二の日は 4人乗りぞ みたがり
進めないと... ドテッ

ハハハ
きゅうきゅうだー!!
釣れないね
（きゅうきゅう）
そうしたら...

（電車から降りる）
あー（の電車に）
行かねー!!
と子どもたちで
やりくり やりくり
2人づつが あちこちを
みてい!

かたはも乗ったーい
いーえー!
自分たちの いじり
スタイルを さがしてしま
うてよー!!

2人づつで
やりくりやりくり

（アゲサが釣まてしばらくは
使いたくない!!）
使いたくない!!
涙を流すことを思い出す。 今子どもたちで
「使いたくない」の言葉に いじりやを
「あー!!」という イ言頼感で できたら
電車から降りる（イじり）ことも 大々的に
やっているのには「はい!!」と思えるので
車乗りやが...!! を楽しんでほしいと、自分たちが 楽しめるときも
自分たちが 作り上げたいことも 素直に言えようと思えるので

充たされ合う自己発揮

すが、こうした「貸してくれるだろう!!」「助けてくれるだろう!!」という信頼感は、人間関係の土台です。

エリク・H・エリクソンは、このような信頼感を「基本的信頼」と呼んで、人間関係の「第一ステージ（第一期）」に置きました。

「子どもどうしの関係が、信頼関係になってくると、それぞれの子どもたちが、安心して自己発揮できるようになるよね」

「うん、それ、わかる。それは違いが許される関係って感じがする」

「そうそう、信頼感ができくると、安心して、違いを発揮できるようになるんですね」

とても大事なことが語り合われています。

ここはポイントですので、少し整理しておきましょう。

エリクソンは、人間関係の育ちが「信頼（第一期）」「自己発揮（第二期）」「決まりづくり（第三期）」の順序で進むと考えました。

茜さんの事例で言えば「貸してくれるだろう!!」という感覚。それは「応答してくれるだろう!!」という信頼の感覚です（第一期の感覚）。

第二期になると、そうした信頼を土台にして自己発揮をします。自己発揮は、それぞれの違

いを発揮することでもあります。だからこそ、そうした自己発揮はすれ違うこともあれば、食い違うこともあります。「自分のコマを廻したい」という人と、「廻したいけど、自分のコマがない」という人とが食い違います。

第三期になると、そうした自己発揮を土台にして決まりづくりを始めます。その際に、第一期で味わった「響き合いの楽しさ」が生きてきます。響き合いの楽しさを存分に味わった人はみんな「楽しさ」で充たされ合うように、自己発揮をし、決まりづくりをします。

「そうした自己発揮は、充たされ合う自己発揮って感じがする」

「それは、響き合う自己発揮って呼んでもいいよね」

「どちらにしても、久保先生の言う『調整しながらの発揮』という言葉より、いいかもしれないですね」

私（久保）は『生命と学びの哲学』（北大路書房、2024年）の237ページで、

「周囲の人が無理に欲望を抑えつけるのではなく、本人が、自分で、抑え方を調整できるようにすること。それを大事にしたいと思っている育児者・保育者が多いと思います」と書きました。

そして、本連載の第7回（2025年7月号）

では、「調整しながら発揮するような、そんな力も身につけてほしい」と書きました。

里菜さんの事例にあるように、子どもたちは「自分のコマを廻したい」という気持ちを調整し、抑制しながら、「園のコマを廻す」という気持ちにして発揮しています。私は、そうした姿を例に出して「調整や抑制を効かせながら発揮すること」は大事ではないかと、研究会のメンバーに語っていました。しかし、研究会の中では、

「調整しながら発揮するとか、抑制を効かせながら発揮するっていう言い方は、あまりしっくりこないですよね」

「抑制って言葉が強すぎると思うんです」

「もっといい言葉があるかもしれないよね」

「子どもたちは、自分たちで『抑制している』

『調整している』とは思っていないだろうし」という話になって、ちょっと評判が悪かったです。

そこで保育者の皆さんに語り合ってもらったのですが、その語り合いから出てきた「充たされ合う自己発揮」や「響き合う自己発揮」という言葉は、私にもしっくりきました。

それは、お互いの自由を生み出し合う自己発揮と呼んでもいいかもしれません。その点について、語り合いは、さらに続いていきました。

「子どもたちって『自分さえよければいい』というわけじゃないんですよ。里菜さんの事

例もそうだけど、『これつけたら自分だけのコマだよ』って、他の人も参加できるやり方を考えるんですよね」

「そうですね。決まりをつくることで抑制が生まれるんじゃないかって、発揮が生まれるんですよね」

「他の誰かの発揮を呼び込むような余白が生まれるんですよ。そんな余白のある関係についてか、余裕のある関係って素敵ですよね」

「それって、違いが許される関係でもありませんよね」

「一人一人、それぞれの発揮が許されているんですよ。うまいとか、へたとかじゃなくて一人一人『違う』。子どもたちどうしは、そういう関係をつくるのが上手ですよね」

決まりをつくることで余白が生まれる。だからこそ、抑制ではなくて、発揮が生まれる。それは違いが許される関係でもある。

語り合いの中では「お互いの心が充たされ合う自己発揮」という言葉も登場しました。苦野一徳さん（熊本大学大学院准教授）は「自由の相互承認」の大切さを述べていますが、それを保育の言葉で語ると、こうなるのか。私は、感動しながら聞いていました。